



東大入試問題にみる学びの方向性

2023年東大地理(第1問A)入試問題に、次のような問題が出されました。この問題文には「人新世」という言葉が含まれます。私たちが生きている現在を「人新世」という新しい地質時代に区分される提案がなされています。これは、人間活動が地球に対して地層にも残るような広範囲なインパクトを与えていることから、付けられた地層の名前です。しかし、人新世という言葉を知らなくても意外と解けそうな問題が出されています。問題文の一つに「人新世の開始時期について検討した地質学者のグループは、放射性物質のピークが地層中に認められることから、開始時期を1950年代とする提案をまとめた。1950年代に放射性物質のピークが現れる理由を、1行で述べよ。」とあります。この模範解答は「米ソによる核実験や核爆発で世界中に放射性物質が拡散したから。」です。これは、6年生でも総合的な学習の時間でも学ぶことですし、社会科だけではなく、地層などの理科の理解も必要となってきます。これからの学びは、教科の枠組みにとらわれず様々な知識を組み合わせるいわゆる「活用」の力が求められます。学びの出口と言うべき大学の入試問題も変わりつつあります。学びの入り口の小学校でも、新しい時代に求められる資質・能力を育成することを念頭に教育活動に取り組みたいと思います。

世界の平均気温高まる!?

WHOは、5月に、今年から5年間、世界の気温が記録的に高まる可能性があるとして発表しました。産業革命前と比べた地球の平均気温の上昇幅が一時的に1.5度を上回る確率を66%と予測。人々の健康や食料生産、水資源の管理など広く影響を及ぼす可能性があるとして警告しています。

この平均気温が高まる要因の一つとして、エルニーニョ現象が挙げられます。エルニーニョは、南米のペルー沖から太平洋中部の赤道域で、海面水温が平年よりも高くなり、その状況が1年以上続く現象です。日本の気象庁も、今年の夏ごろまでにエルニーニョが高確率で発生するとみています。

WHOは、レポートの中で、①世界の単年の平均気温が少なくとも1回は観測史上最高となる確率 ②5年間の世界の平均気温が過去最高を記録する更新する確率 をいずれも98%と予測しました。

過去にも日本では、エルニーニョの影響で、気象状況の急変、食料品の価格高騰等につながったことがあります。今後の動向に気を付けておきたいですね。

